東川物語

下久保山、美瀬谷山国有林

火消し地蔵

平家落人の虎馬御前が西の川で減びると分散して下久保へ来て土地を拓き、下久保のもとをつくった。先祖神の氏神は京都のもので雨若神社とされ、全国でたった二社しかなく京都由来とされるゆえん。それと秋葉権現愛宕の地蔵様で火を鎮める力が厳然としているという。この地蔵様も京都から背負ってきたもので、今でも火事があった時、「下久保のお地蔵様、どうぞお願いします」と祈ったら隣が焼けてもその家へは火が燃え移らないというたいへんご利益のあるえらいお地蔵様である。

シカの食害も多い

東川村

昭和29年に安芸市と合併するまでの東川村は、奈比賀、入河内、黒瀬、大井、古井、島別役から成り立っていた。

2017.4月人口 東川 280人
川北 2989人
安芸市計 17,786人

飛鉢の法と八ノ谷

堂平に真牧山長谷寺があった。そこには落ちそうな大岩があり（今もあるとのこと）坊さんがその岩の上から札を入れた鉢を法文により各地へ飛ばしていた。その法文を「飛鉢の法」という。札を受け取った人は、トキ（煮・御布施）を入れて戻していた。ある時、八ノ谷へ鉢を飛ばしたら、八ノ谷の人が魚を入れたところ、八ノ谷の上の空で鉢が割れた。それ以来、坊さんは魚を食われなくなり、鉢が割れたところを「八ノ谷」と呼ぶようになった。この法は高知の比島の寺と国分寺に残っているそうだ。

伴じ物伝承

字の読み書きができなかった以前の若者たちは、身近にある草花や物に託して恋情を表現していた。八ノ谷や入河内では、娘が山仕事などの時、恋しい男の弁当箱にそっと小石9個と大石1個を入れ「恋しい（小石）ここのつ想い（重い）はひとつ」ということを伝えたりしていたという。

下久保 馬のひづめの跡

丸石のトンネルから下久保方面へ4km。川の石に馬のひづめの跡が刻まれている所がある。1185年、壇ノ浦の戦で源氏に敗れた平家の落人が物部村の方より谷川を下って馬を走らせていたところで、馬の脚がすべってひづめ形のくぼみができたといわれる伝説

ひび谷のお釜の蛇　水鏡は見られん

黒瀬の下の「ひび谷」のお釜（淵）に蛇がおった。その蛇が出稼ぎに出ている亭主に化けて毎晩、嫁のもとへやってきていた。戻った亭主が化物と見破り、その蛇の化身に針と糸をつけると、ひび谷まで戻って行った。蛇は金物を嫌うため、針に打たれ命が果てたが嫁さんは蛇の種をはらみ、ぎゃる（おたまじゃくし）みたいな蛇の子をタライ一杯、産んだという。どうして嫁さんが蛇に見込まれたかというと「水鏡に顔を映して見られん。蛇に見込まれるき絶対に水鏡をするもんじゃない」と言われていたが貧乏で鏡がないので、たびたび水鏡へ顔を映して見ていたからだという。

黒瀬

大井へ

小石9つ 大石1つ

恋しい想いはひとつ

八坂神社

番匠

山の上に鎮座する船岡神社
秋の神祭では市の文化財に指定されている獅子舞が奉納される。この起源は、大蛇を殺した祟りを鎮めるためにはじまったとのこと。ほとんどの神社は南向きに建てられることが多いが、船岡神社は西向きに祀られている。このお宮を太平洋に向けると船が止まって動かなくなるため、西向きに建てられ、祀られているという。昔は浜から漁師が熱心に参拝していた。

船岡神社の祭神は「丹生姫」という女神様。その昔、大きな台風が通り入河内では跡かたもなく飛ばされた。イワナガ姫を祀っていたお宮も流されてしまった。しばらくして安芸の浜のヨロズヤという漁師の網にイワナガ姫がかかり、引きあげられ、入河内の人がもらりうけ、船岡山に祀ったと伝えられている。

丸石

せんのさつま

その昔、入河内に千薩摩の守という、とても法力の強い丈夫があった。松明を仲間の所に法力で飛ばして送ったり、火を使わずに碗の中で大豆でも小豆でも煮て食べたり。放火されて襲われた時は「大雨の法」で火を消して相手を流して退治したり。土佐の城下の山内公が地鎮祭をするために呼ばれたりもする偉い人だった。ある年の大みそ日、天狗が五位ヶ森からオバレにおりてくることになった。丈夫は「岩の切」を結んで大岩に化けていたが、天狗に杖でツンと左太股を突かれ、それ以来、法力が使えなくなったという。千薩摩は丸石の生まれの人で、丸石へ行くトンネルの所へ祀られている。

山ノ帰りのたのしみ

丸石トンネル（昭和12年）

丸石

江川川

JA東川

文 東川小学校

お茶工場

茶畑

〒郵便局

G9

公民館

集落活動センター「かまん東川」

公衆電話

船岡神社

入河内の氏神様

この山が舟に似た形で「丹の岡」とか「丹生が岡」と呼ばれていた。「丹」が「舟」に変わったという。

お茶畑

入河内の美しい山村風景が一望できるところ。
桜、新茶、柚子、大根四季を通して美しい。

← こまどり温泉
← 江川へ八ノ谷

東川小学校は特認校なので安芸市内のどこに住んでいても通うことができる。

入河内

安芸市中心部、国道55号から伊尾木川をさかのぼること30分（12km）。ぽっかりと空間がひらけて柚子や茶畑が広がる明るくのどかな中山間集落。くねくねの一本道を走ってくるとこの風景にほっとする。オランスみたいな美しい地区。現在は約80人の人々が暮らしている。安芸市と合併する前の東川村時代には役場が置かれ東川村の中心地であった。

柚子畑

参考文献
「安芸市の民話」
「安芸市史」
「高知新聞」
外

奈比賀へ

奈比賀は並川とも書いていた。伊尾木川、小川川、名村川が並び流れることに由来する地名。

「森林軌道の鉄橋」「坂本橋」峠より樹木の間から見える。S37年广線。

県道大久保伊尾木線 207号
S29年高知県交通が安芸入河内線乗り入れ開始。S46广止され代替市営バスとなる。現在、オレンジ黄色の「元気バス」運行。

大根の王様 入河内大根

地上に出た首の部分が赤紫色を帯び丸っこい形で、大きいものは7～10kgにも成長する入河内を像徴する大根の王様。平家落人が持ち込んだともいわれる伝統野菜。甘みがあり、生でもおいしい。煮崩れをせず味もしみこみやすく煮物にぴったり。12月下旬から収穫が始まり1月に急激に肥大する。出荷が始まると公民館前にのぼりが立ち、良心市に入河内大根が並ぶ。入河内大根を使ったレパートリーもタフ彩。